オープニングセミナー 6



「生活で使える手」をともに描くための評価戦略

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科
早﨑 涼太

手外科領域におけるリハビリテーションの主目的は，良好な関節可動域と筋力を獲得し，「生活で使える手（Useful Hand）」を獲得することにある．しかし，近年の知見では，関節可動域をはじめとした身体機能の改善と，対象者が日常生活で抱く「手の使用困難感」や「生活の満足度」の改善は，必ずしも相関しないことが示唆されている．この事実は，我々療法士に，機能訓練の先にある「生活」をどのように捉え，評価すべきかという問いを投げかけている．そこで本講演では，対象者とともに「生活で使える手」を描き，再獲得していくための評価戦略を，作業療法士の視点から紐解いていきたい．

手関節・手指疾患の予後を考える上で，受傷後や術後早期から二次的機能障害を最小限に留めることは避けて通れない重要課題である．緻密かつ繊細な解剖学的構造を有し，多様な組織が密に隣接する当該領域において，拘縮は手の実用性を著しく阻害する要因となる．また，感覚・知覚障害は対象物の識別や物体把持の微調整，巧緻動作を妨げ，実用性の低下に直結する．さらに，疼痛に起因する固有感覚のエラーは運動出力の不整合や恐怖回避行動を惹起し，治療意欲の減退や学習性不使用を加速させることにも留意が必要である．このような多角的病態を防ぎ，適切な介入を行うために不可欠な機能解剖学的視点を整理し，臨床において活用し得る評価の捉え方と進め方を紹介する．

そして，「生活で使える手」をともに描くには，機能的目標と価値観を統合する「Three-goal model」が有用と考えている．リハビリテーションの成果を真に生活の質へと繋げるには，対象者と療法士が共有された目標に向かって歩むことが不可欠となる．両者の目標の不一致を防ぐために，カナダ作業遂行測定（COPM）を用いて生活上の問題を特定し，さらに ADOC や ADOC-H といった意思決定支援ツールを活用した対話を行う．イラストによる可視化により，生活に直結した主目標や，具体的場面での手の使い方といった副次目標を明確に共有することが可能となる．また，介入手段の選択においても共有意思決定のプロセスを重視し，利得と負担を説明した上で合意形成を図る．作業を基盤としたトップダウン評価と機能面に焦点を当てたボトムアップ評価を内包し，目標の実施状況を継続的にモニタリングすることで，身体機能訓練の波及効果を最大化させることが可能になると考える．

略歴

【学歴】
2015 年 3 月　札幌医科大学保健医療学部作業療法学科　卒業
2019 年 3 月　札幌医科大学大学院保健医療学研究科博士課程前期　修了
2025 年 3 月　札幌医科大学大学院保健医療学研究科博士課程後期　修了

【職歴】
2015 年 4 月　えにわ病院
2016 年 4 月　札幌円山整形外科病院
2019 年 4 月　北海道大野記念病院（現：札幌孝仁会記念病院）
2023 年 4 月　札幌医科大学保健医療学部作業療法学科　助手
2024 年 4 月　札幌円山整形外科クリニック（非常勤）
2025 年 4 月　札幌医科大学保健医療学部作業療法学科　助教（現在に至る）